



Title	国内外の緊急・復興支援事業のフィールド・マネージャーの経験より：ソーシャルキャピタルを利用した災害公衆衛生の考察
Author(s)	森田, 佳奈子
Citation	大阪公衆衛生. 2019, 90, p. 23-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

国内外の緊急・復興支援事業の フィールド・マネージャーの経験より ～ソーシャルキャピタルを利用した災害公衆衛生の考察～

森田 佳奈子

長崎大学熱帯医学研究所国際保健分野協力研究員

1. はじめに

本稿では、著者の生い立ちから国際保健を志し、国内外の緊急・復興支援事業のフィールド・マネージャーの経験から、ハイチ共和国の緊急復興支援活動におけるソーシャルキャピタル（住民信頼関係）を通じた災害公衆衛生介入について私見を述べ後世へ育みたい。

2. 原点回帰

私は大阪で生まれ育ち、幼少期にはフィリピンの孤児（仮）メアリーと生活を共にした。学校長だった父の熱烈な孤児支援活動は家庭にまで及んだのだ。母、私、妹2人は、父がメアリーへ食事、お風呂、寝かしつける姿にあきれながらも、乳児院勤めの母は寛容で孤児との生活も我が家の日常となった。そして、孤児のメアリーに何ができるか？と問う中、国際保健を志す。その後、JICA青年海外協力隊（ドミニカ共和国プライマリーヘルスケアプロジェクト）、国際NGOで緊急医療支援活動（M8.8チリ大地震（2010）M7.0ハイチ大地震 緊急/復興支援（2010）M9.0東日本大震災（2011））へ出向した。その後、第一子の妊娠・出産・育児休暇を得て、赤道ギニア病院経営プロジェクトの長期専門家（2014）に従事し、2016年ハイチ共和国コレラ感染症緊急医療支援では、長年築

いた現地の人々とのソーシャルキャピタル（住民信頼関係）が生かされた活動となった。どの現場も過酷な状況が脳裏に残るが、フィールドでの人道支援は人々の輪と叡智を分け合う、まさに実践教育の場であった。

3. ハイチ支援とソーシャルキャピタルの活用事例

国際保健活動では、グローバル/ナショナルレベルの保健行政システムを理解し、NGOの立場では「Think Globally and Act Locally」と、現場、現地に重点を置き、人々に寄り添う活動を目指す。フィールドワークでは理論は頭に叩き込み、実践では「ローカルイニシアティブ＝現場主義」と「ソーシャルキャピタル＝住民信頼関係」と、地域住民を尊重する姿勢が、国際災害公衆衛生プログラムを地域の中へ根付かせる要点となった。特に、ハイチのように大統領不在時には保健行政が機能せず、国や政府へ頼るより地域や親族間の結束力による住民組織活動が救いの手となった。私たちは地域住民からの厚い信頼を得て、いまでもハイチのフィールドでは地域住民が主体となり事業が継続されている。

ソーシャルキャピタルと健康格差

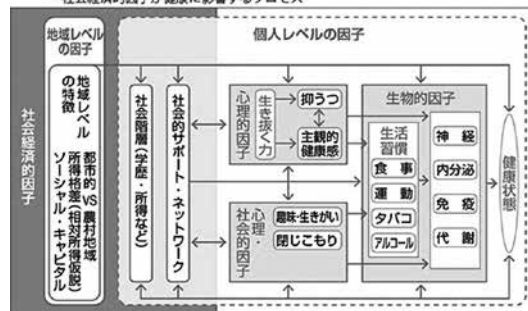


幼少期のメアリーを思
いだす一枚（飢餓の子）



180名の地域住民を組織化した
保健委員会のボランティアチーム

図②: 健康の生物・心理・社会モデル (bio-psycho-social model)
ー社会経済的因子が健康に影響するプロセス



近藤克則著「健康格差社会への処方箋」より抜粋

医学書院/週刊医学界新聞（第3214号）より

4. 開発手法と改善手法からの学び

約12年間、カリブ諸国での緊急・復興支援活動から得た知見は、国際保健協力活動の「開発手法」として大規模事業など技術移転に資金投入するより「改善手法」として人々の生活の中から知恵や資源を見つけ、住民が主体となる事業となるようサポートする。結果、住民たちの内発力が高まり地域住民同士の人間関係の良さが幸福感に繋がり、持続可能で継続しやすいことを学んだ。この経験を元に「大阪の公衆衛生」を考えると、大阪の人々の強い帰属意識や土着性の中からの知恵や発想など独特な大阪文化と、患者や地域住民の疾病や怪我の初期対応、感染症の予防対策、日常生活相談など、権威的な外部者より文化慣習や心理面に配慮ができる医療従事者に寄り添い、助言を求めたいのも世界万国共通である。

2012年度にはハイチから医師3名を招き、保健行政や大阪あいりん地域での保健医療研修を実施した。彼らが知るステレオタイプの日本から、大阪でも異なる生活環境の人々と文化慣習に沿った感染症対策や保健活動は驚きの様子だったが、ハイチの医師等の主体的な学びと取り組みは、結果的にいまもハイチの地域医療の活動が続けられて

いる。

このソーシャルキャピタル促進を利用した国際公衆衛生活動は、日本にも代用できると考えている。核家族や人間関係の希薄さが背景にある日本の精神疾患患者や、ひきこもり人々、またLGBTなど社会的マイノリティーなどの当事者と専門家の協働の学びの場や、疾病や感染症など予防医学を促進するための意図的な地域コミュニティ形成など、地域住民が主体となり各専門家を巻き込む地域保健活動の効果を試みている。

5. 最後に～大阪から世界へ羽ばたく人材作り～

生家のお大阪から、今日に至るまで同僚や先輩からの学び、地域の人々からの支えと教え、指導教官からの助言と励ましは途上国の現場にいる時ほど心の礎となりました。特にハイチやアフリカ諸国の人々と相互で学び得た経験は、ひとりの人間として強く大きく成長させてくれました。これからも地元のお大阪に還元すると共に、世界へ羽ばたく人材として国際公衆衛生のフィールドで得た知見を、最も支援を必要とする人々へ届く活動に貢献することができると嬉しく思います。